1976年度秋季研究発表会

1976年度の秋季研究発表会は，9月30日～10月1日，名古屋市公会堂において行なわれました．特別テーマは「交通」(発表論文数19件)で，特別講演3件も行なわれました．

最多発表論文数　発表論文数は，一般発表54(うち特別テーマ9)，ペーパー・フェア55(うち特別テーマ10)，合計109件でした．75年度秋季の64件，76年度春季の60件と比べて，ほぼ2倍となりました．

このように，過去最多論文数となった原因については現在のところよくわかりません．学会員が増加したこと，「オペレーションズ・リサーチ」誌の“学会だより”に研究発表会の案内がくり返し掲載されたことも原因の1つでしょう．OR的に原因を明らかにすることが，OR学会の発展に役立つかもしれません．

当初，発表論文数を60～70件と予想していましたので，発表会の設営・運営構想がくるってしまいました．スタート時刻を午前9時にくりあげ，ペーパー・フェアを12件も並行実施し，昼休みを40分に短縮するなどして，カバーしました．アブストラクトも分厚くなり，予算が2倍かかってしまいました．

出席者数は，正会員172人，学生会員57人，賛助会員32人，非会員24人，合計285人でした．発表論文数のわりに参加者数は少なかったのではないかと思われます．これは，9月30～31日に，公労協のストが予定されていたことも影響しているようです．

懇親会には61人，愛知県警交通管制センター見学には49人，明治村見学には29人の参加がありました．

もてたペーパー・フェア　論文受付時点では，一般発表60件，ペーパー・フェア49件でした．一般発表の申込みのほうが，はるかに多いだろうと予想していましたが，ほぼ半々の申込みでホッとしました．一般発表6件を，発表者にお願いしてペーパー・フェアにかえていただきました．誌上をかりて，お礼申しあげます．

ペーパー・フェア参加人員を，開始10分後と終了10分前に調査したところ，29日では最大165人，最小130人，30日では最大132人，最小94人でした．発表ブース別にみますと最大36人，最小4人と大きな差がありました．だいたいの傾向として特別テーマによく人が集まっていたこと，またビラに数式をギッチリ書いた発表よりも日本語を書いた発表のほうが，理論の展開よりも事例研究のほうが，多くの人を集めたようです．

発表スケジュールの別刷不要　本部に，発表スケジュールと発表題目一覧を，「オペレーションズ・リサーチ」誌の別刷として持参していただきましたが，今回は参加者から，この別刷をほしいという要求が1件もありませんでした．このことは，アブストラクトに掲載した発表スケジュールと発表題目一覧が見やすかったからであろうと思います．

ともあれ，研究発表会は成功裡に終了し，雑用係としては，やれやれという感じです．

(中部支部庶務幹事　電電公社　**吉野玄一**)

一般発表

久しぶりに参加したら，さっそく顔見知りの幹事さんから一般発表について感想を書けと頼まれてしまった．企業に身をおく立場から，それも相当にかたよりがあってもよいことを承知してもらって筆をとった次第である．

今回は2日間ともペーパー・フェアは午後になっていて，午前は一般発表に専心して聞ける配慮がなされ，好感が持てた．一般発表は3会場にわかれ，関心のある発表を選択して聞きやすくなっており，発表ごとに会場を移動する人もかなり多く，運営はまず成功したと言えよう．

第1日の前半は，LPモデルで制約ベクトルを確率変数としてあつかう確率的計画法について3件の発表を聞く．2件は解法，1件は事例で，1つの話題をまとめて聞くことができ理解を深めるうえに役立った．実務上，モデルづくりにおいて，このニーズは強く，従来は制約条件の数を多くして解を求めていた問題である．安易に変数・条件式を増加させてコンピュータにたよりすぎる面への1つの反省とも考えると，実務家は，当面なんとかどろ臭く解いているとしても，新しい手法の開拓という興味深いテーマであろう．

後半は「経営計画サポート・システムのための汎用システム」の発表を聞く．時間が限られており原則的な考え方の紹介にとどまったのが残念であるが，経営計画モデルを一方向性のネットワーク構造としてとらえ，階層づけを容易にし，誰にでもわかりやすくすることをねら

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

い，実用性の高いものではなかろうか．同じような考え方はよそでも聞くことがあり，この分野ではコンピュータをいかにして活用したか，事例の経験に裏づけられた各方面からの発表を期待したい．

2日目は特別テーマ「交通」の一部を聞く．鉄道輸送関係が2件と新輸送方式による大気汚染削減効果の調査事例である．具体的な事例にもとづいた発表には，なにげない工夫にも共感をよぶものがある．

2日目の後半は「夏季における最大電力の分析とその確率モデル」を聞く．気温と最大電力の相関はよく知られているが，よくみると月間最大電力は気温との相関が飽和している高温領域で発生している．この高温領域の日数が年により変動していることを取り入れた，最大電力発生の確率モデルを提案したものである．実績をこの観点から修正すると一歩すすめた分析ができよう．

つぎに，「需要レイトが計画期間内で1回変化する在庫問題の解法」を聞く．これは需要を累積カーブであらわし，図解的に在庫問題を解くもので，関連したテーマがペーパー・フェアでも発表された．たまたま筆者は13年前OR学会で特殊な事例として，需要が漸減する場合の在庫模型の作図解法を発表したことがあり興味深かった．簡単すぎると実用的なものであっても，それをもう一歩深めた体系化がまだされていないことを感じた．理論としては，やさしすぎて興味がわかないのかもしれないが，若い学徒は，ぜひこういう学会で企業の会員からの生々しい発表にも目を向け，それをヒントに材料を発掘し体系化するところまで発展させていただきたいものである．

最後に，発表型式についても一言ふれたい．ペーパー・フェアは47年秋北海道支部の努力で生まれて5年経ち，今回はすっかり地についてきた感があった．しかし，まだ単に時間の長い一般発表と考え，せっかくのアットホームな討論の場として活用されていないむきもあり，一方，一般発表で質疑の打ち切られもめだった．そろそろ両者の特長を生かした新しい発表型式も試みられてよいのではなかろうか．　（中国電力　**権藤　元**）

ペーパー・フェア

ペーパー・フェアもその回数を重ねるにつれ，学会の研究発表会にすっかり浸透したように思われる．ペーパー・フェアについては，本誌での何人かの方々から言及，喚起されたが，今回の名古屋でのペーパー・フェアについて感じ，考えたことを主催者側の一員としてルポ風に述べたいと思う．

まず第一に発表申込件数が多く，12ブースが設けられ，会場（市公会堂）の活気と喧噪に言及したい．会場中央に位置すると，12のブースからの発表者の声が1つに混り合い，こもっていたことを思いだす．

以下に，今回のペーパー・フェアについて感じ，気づいたことを箇条書にしてみた．

1. ブースによって発表形式に相違がみられること
2. お客同士の議論があって，ペーパー・フェアの長所が散見されたこと
3. 一般発表と同じ講義形式に行なう発表者もいるが，それはそれでよいのではないかと感じたこと
4. 待ち行列に関するブースは一般に盛況で，討論も活発であること
5. 事例発表（たとえば名鉄遊船など企業の人たちの）の中には，図表，絵および写真などを用いてなされ，その準備がよく整い，理解しやすいものがあったこと
6. 発表開始と途中とでお客の数にかなりの変化があり，自由に出入りするお客の移動性を示していたこと

1，2，3および6に対する個人的な見解ではあるが，かつて本誌でペーパー・フェアの夜店形式がとくに強調されたが，ペーパー・フェアの形式は，あまり固定的に考えずに自由にして，発表者とその発表内容およびお客の要望，反応に応じて行なってよいのではないだろうか．なぜなら，もともとアメリカではじまったこの形式は研究中のものおよび聴衆の少ない発表のために，お客と発表者が自由に議論しやすいように，そしてその発表ができるだけ多く行なわれ，できるだけ数多く聴けるようにという主旨ではじめられたのだから．したがって1つのブースにあまりたくさんのお客が集中すると後部座席の人には聞き取りにくいばかりでなく，発表自体が一方通行になりがちであるから，そのような発表は一般発表に回したほうが望ましい．その限度はだいたい10人ほどであろうか．同じことに関心を持っている人で5～6人集っているのが理想的に思われる．4に関しては，日本ではその研究者の数も多く理論的体系の美しさに加えて，日本人の「待つこと」の嫌いな国民性のためではないかと愚考した．5に関しては，理論的貢献度は低くても，このような事例発表のようによく準備され理解しやすいように報告することの重要性を強調したい．とくに，若い大学関係者の中には，理論的興味に走って聞き手に理解させようという努力が足りないように思われる．もちろん，企業の人たちは上役なり企業の中で自己の企画に対する賛成を得なければならない必要性があるが，大学関係者もその学会発表にあたって理論的貢献度だけでなく，さらにその内容をわかりやすく理解させようとする努力とその準備にも力を注ぐべきであろうと，アメリカのOR学会などへの参加を思い出して筆者がとくに感じたことである．　（南山大学　経営学部　**沢木勝茂**）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．